

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2018.7) 平成29年度:61.

心不全患者への指導において、血圧や体重の記録を促す事による意識・行動の変化

中村 歩, 上出 雪実, 杉本 菜摘, 曾根 祥大

心不全患者への指導において、血圧や体重の記録を

促す事による意識・行動の変化

キーワード：心不全 記録 行動変容 意識変容 生活指導

○中村歩・上出雪実・杉本菜摘・曾根祥大

旭川医科大学病院 9階西ナーステーション

I. 目的

本研究では心不全患者が血圧や体重を記録し、看護師から疾患や生活の指導を受けることで意識・行動にどのような変化があるかを明らかにする。

II. 方法

- 1) 調査期間：平成28年5月～平成28年12月
- 2) 研究対象：A病院B病棟で心不全の治療を受け、心不全に関する指導を初めて受ける患者12名（除外基準：病状が重篤な者、せん妄状態、認知症患者）
- 3) 研究デザイン：質的記述的研究
- 4) データ収集方法：対象となる心不全患者の診療記録、看護記録を分析した。
- 5) 分析方法：逐語録を作成し、心不全管理に関する意識・行動の変化に関する内容をコード化し、共通の意味を持つコードを集めてカテゴリー化した。

III. 倫理的配慮

本研究はA病院の倫理委員会の承認を得て実施した。また、審査委員会で承認の得られた公開文書をA病院の倫理委員会ホームページに掲載し情報公開を行うことで研究への拒否機会を保障した。

IV. 結果

血圧・体重・自覚症状の記録の実際と、記録することでの気づきや認識の変化について31個のサブカテゴリー、8個のカテゴリーを抽出した。カテゴリーは、【心不全症状として息切れ、浮腫、体重増加を自覚していた】、【食事、水分の摂取が心不全症状に影響していたと気付いた】、【入院時の状態と比較し、現在の自身の状態について知ることができた】、【浮腫や体重増加、倦怠感が心不全の症状であるとわかった】、【自覚症状や血圧、体重の記録を行うことが自身の体調管理に有効だと分かる】、【今までの健康管理を意識した生活習慣を振り返る】、【改善が必要と考えられる生活習慣】、【健康管理に対する行動変容の意欲が高まった】に分けられた。介入を行うことで対象者自身が身体状況や今までの生活習慣について振り返り、食事制限やセルフモニタリングを行うことへの意欲の向上がみられた。加えて、血圧・体重の記録を継続するという行動の変容が起っていた。

V. 考察

浮腫などの自覚症状の確認を毎日促すことにより、心不全症状の気付きにつながった。血圧、体重を毎日測定している対象者もいたが、多くが実施する習慣はなかった。血圧、体重の記録を促し必要性について指導を行うことで、自発的に対象者全員が記録を行うようになった。それに伴い体重の変化が心不全によって起きていることや、自身の血圧の平均値を知ることができていた。記録を続けることで自覚症状、血圧や体重の変化に気付き心不全と結びつけて考えていくことが退院後の患者のセルフモニタリングの力を高めることや早期受診に繋がると考えられる。

また、多くの患者が心不全の自覚症状の変化を認識するなかで、これまでの生活習慣について振り返る様子が見られた。症状の変化について疑問を抱くことで生活との関連を知り、今後の食事などを改善する必要性を見出すことができる。また一方で、治療により体重や浮腫は急激に改善が見られるが、血圧は日内変動はあるものの、一定の値を示すことが多く自覚症状も乏しいため、血圧値の変動を早期受診に結びつけて考えたり生活との関連を見出す患者は少なかった。そのため、血圧と生活習慣との関連や退院後も継続して記録する必要性について指導が必要になる。それに加えて、服部ら¹⁾が述べたように看護師が指導を行い意味づけすることで、セルフモニタリングの必要性の理解や、より自身の退院後の生活改善に向けた考えを深めることができる。と考える。

VI. 結論

自覚症状、血圧、体重の記録を行い、変化に気付き、心不全と関連して考えることが退院後の患者のセルフモニタリング力や生活習慣改善への意欲を高めることにつながる。加えて、看護師が指導を行い記録された内容の意味づけをすることで、患者の退院後の生活改善に向けて考えを深めることが出来る。また、血圧は一定値から変動が少なく自覚症状も乏しいため、生活との関連を見出す事が難しいことが示唆された。

引用文献

- 1) 服部容子：心不全患者のセルフモニタリングの概念分析、日本看護科学会誌、30(2)、P74-82、2009